弘前大学教育学部紀要　第82号：87～95（1999年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 82：87～95（Oct. 1999）

弘前女学校の音楽教育

Music Education at Hirosaki Girl's School

安田　寛*・北原かな子**
Hiroshi YASUDA・Kanako KITAHARA

論文要旨

明治期に日本に導入された洋楽が普及していった過程については，以前は，制度的側面を中心とした伊沢らの業績のみに目がそそがれがちであったが，近年宣教師たちが行った讃美歌を中心とした教育にも注目し，広い視野に立って，日本人と洋楽との関係を問い直そうとする動きが出てくるようになった。

しかしながら，一つの地方に注目し，学校教育と宣教師たちによる教育との双方を対比的に把握し，制度面のみならずその内実を明らかにしようとした研究は，これまでのところ，なかったと言って良い。筆者らはこれまで，明治初期からキリスト教が普及すると同時に学校教育も行われ，かつ，古い史料が今日に至るまで数多く残されているという，きわめて珍しいケースとして津軽地方弘前に注目し，東奥義塾，函館遺愛女学校について考察を行ってきた。本稿は，これまでの研究を踏まえ，主に明治二十年代以降の弘前女学校を中心とした，津軽地方弘前での洋楽普及過程の一端を考察する。

キーワード：洋楽受容史，唱歌，弘前女学校，成田らく，発音矯正

弘前女学校について

明治十九年六月二十五日，本多庸一などメソジスト派の人々によって，弘前教会堂内に来徳女学校が設けられた。同校は翌二十年に弘前遺愛女学校と改名した後，明治二十二年六月二十五日に弘前女学校として開校した。当時の青森県内は，津軽地方のみならず全般的に女子就学率が低く，明治五年の学制発布以来の県教育関係者の努力にもかかわらず，なかなか就学率があがらなかった。その原因の一つと考えられていたのは，女子教員の不足である[注1]。青森県弘前には，明治十年に県立女子師範学校が開校したものの，財政難などの理由で明治十八年五月には閉校となった。以来，明治三十二年に青森県尋常師範学校講習科で女子生徒を受け入れるようになるまで，青森県には公立の女子教員養成期間がなかったのである。また，青森県に公立女子中等教育の体制が整うのも，高等女学校令が施行された後のことで，県立第一高等女学校が弘前に開校したのは，明治三十三年のことであった。こうした中で，弘前女学校は明治二十二年開校以来明治三十年代半ばまで，青森県内にほぼ唯一の女子中等教育機関であった。同

＊　弘前大学教育学部音楽科教室
Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University
＊＊東北大学国際文化学会会員
Member of Tohoku University Society for Internatibnal Cultural Studies

校出身で近隣小学校の教師として教鞭を取る者も多く，明治三十年代半ばには，津軽地方の小学校で弘前女学校出身者がいない小学校はほとんど無かったとつたえられる[注2]。

弘前女学校は，必ずしも財政的には恵まれない私学であったが，残されているカリキュラムなどを見るかぎり，明治前期の地方私立女子教育機関としては，かなり高度な教育を行っていたようである。一般に明治期は，女子の中等教育と言っても，あくまでも国の基本方針は良妻賢母の育成であった。たとえば明治二十八年に文部省によって示された高等女学校規程などをみても，学科目は家事や裁縫などの割合が大きく，数学や外国語は余り重要視されていないことがわかる。しかし，弘前女学校の場合，明治二十二年の開校当初のカリキュラムを見ると，数学及び英語などの語学教育が大きな比重を占めていた。特に同校は外国語教育に力を入れており，本科生は週六時間の英語の時間のほか，「家政・礼式」の授業で使われた生理学や経済学の教科書，また化学や歴史の教科書も英書が用いられた[注3]。これらの英書は，タイトルから判断して当時弘前で男子に中等教育を行っていた東奥義塾と同じものもあったと考えられる[注4]。男子の中等教育と女子中等教育とでは，その内容にかなりの違いがあった時代であったことを考えると，弘前女学校の教育水準の高さが窺われる。

同校の卒業生は，キリスト教の宣教活動に従事する他，先に述べたように近隣の小学校などの女子教員として活躍したものも多かった。明治期の津軽地方において，公立の女子中等教育体制がととのってくるまでの間，初等教育を通じて女子教育にもかなり影響力を持った学校であったのである。

最初の教師，成田らくについて

明治前期の弘前女学校においてどのような音楽教育がなされていたか，これまで若干明らかになった部分については，別稿においてすでに述べたとおりである[注5]。明治二十年頃には長嶺サダによって讃美歌教育が行われ[注6]，明治二十一年には，オルガンも装備された[注7]。明治二十二年六月二十五日の弘前女学校開校式では，オルガン演奏により，出席者全員で讃美歌を歌った[注8]。

弘前女学校で初期に教鞭をとったのは，長嶺サダ，白戸さだ，成田らくの三人と伝えられる[注9]。このうち，長嶺サダについては別稿において取り上げたので，これまで分っている範囲において，成田らくについて述べる[注10]。成田らくは，明治三年四月五日に西津軽郡山田村に生まれ，明治十年一月から明治十五年九月まで山田小学校[注11]で学んだ。明治十八年三月から県立女子師範学校で学び，明治十八年五月に卒業している[注12]。県立女子師範学校在学期間が極めて短いことから，学業修了というよりは，同年五月八日の県立女子師範学校廃止決定により，やむを得ず卒業扱いとなったとも考えられる。成田らくに関して，音楽的な視点から興味深いことは，成田らくが，幼いころから讃美歌に親しんでいたということである。讃美歌との関係についてこれまでのところ本人が直接書き残したものは見つかっていないが，成田らくが没後に遺族がまとめた冊子[注13]に次のように書かれている。

> （成田らくは）当時の女性としては珍しく英語を知っておられた。ある日，私は母上の鏡箱の中に，和紙に毛筆で英語を書いたものを見つけた。これは何ですかと尋ねたところ，小さいとき，珍田伯父上（珍田捨己）[注14]や父上[注15]その他とともに，弘前の宣教師から教わった讃美歌だとのことであった。歌ってみて下さいと申したところ，例のまじめな態度

で歌い出した。それは妹たちが山中姉妹と歌っている「主われを愛す，主は強ければ……」の英語のものであった。後節の「わが主イエス，わが主イエス」のところを一段と調子を高めて歌われたのが印象的であった[注16]。

ここに見られるように，成田らくが幼少時に珍田捨己らと共に宣教師から讃美歌をおそわったということが事実であれば，その宣教師とはおそらくジョン・イング夫妻のことである[注17]。この記述のみではどの様な形で成田らくが讃美歌を習っていたのか，具体的なことは不明であるが，公立の小学校で学んだ後，県立女子師範学校を卒業し，弘前女学校最初の教師として着任した女性が，宣教師の影響により西洋音楽に理解をもっていたことを示す，興味深い証言である。

弘前女学校の音楽教育

ここでは，弘前女学校を中心にした弘前の音楽教育の進展を女学校が開校した一八八九年から一八九五年まで，主に日本メソジスト監督教会婦人宣教師会議(the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan）の議事録によって見て行く。

開校当初の課程には，尋常小学科四年，高等小学科四年，本科三年の課程があり，高等小学科一年と二年は単音唱歌が，三年と四年は単複音唱歌がそれぞれ週二時間あり，本科では全学年を通じて複音唱歌が週一時間あった[注18]。教科書には文部省編纂の『唱歌集』が使われた[注19]。

メソジスト監督教会の婦人海外伝道会によって弘前女学校の校長に任命されたミス・ハンプトン（Miss M. S. Hampton）はデカルソン（Miss Augusta Dickerson）と共に，秋八週間弘前女学校で教えた[注20]。その際，ミス・ハンプトンは一週間に午後一回，英語を学んでいる弘前女学校生徒を自宅に招き歌唱を指導した[注21]。

一八九〇年二月に，横浜の聖書訓練学校で勉強したタカミ夫人が街頭学校（street school）を組織した。出席者は平均して五十人で，教師は三名であった。子供たちにはモーセの十戒や聖書の他に讃美歌の歌唱が教えられた[注22]。

七月に本多庸一が米国遊学から帰国すると，東京英和学校，後の青山学院の校長に就任したので，弘前女学校教頭であった本多ていが学校を去ることになった。彼女の教育者としての能力は宣教師からも極めて高く評価されていて[注23]，彼女を失ったことは女学校にとって大きな痛手であった。

夏までに，弘前教会配下の日曜学校は市内と周辺とで四校になり，歌唱の魅力によって百名近い出席者があった[注24]。八月には，タカミ夫人が聖書婦人として働き，弘前教会の日曜学校では婦人会を教えた。

ミス・ボーカス（Miss G. Baucus）女学校校長は，一八九一年四月から三ヶ月弘前に滞在した。九月のはじめにパスポートを手にし，弘前に出発した。懸案であった洋式の煙突とその他の修繕が冬の到来前に完成し，冬の間も滞在することがようやく可能になった[注25]。この家屋は，女学校と道路一つ隔てた塩分町にあった元士族の住居を女学校開設時に購入したもので，小さな庭がついた四部屋の解放的家屋で夏にはよかったが，冬の防寒には全く役立たなかったのである[注26]。暖房設備が整ったことで，婦人宣教師が一年を通して弘前に滞在することが可能になった。

ボーカスが，他の仕事と同様，学校で最も役立っていると述べたオタケ・オセイが学校で翻

訳と歌唱を教えた[注27]。

ミス・ボーカスは一八九二年九月一日から自宅で子守娘学校を開いた[注28]。しかし，当初は不規則な出席と赤ん坊の鳴き声でどうにもならなかった。

聖経女学校第四回卒生の武田すが，鈴木せん，第五回卒業生の小舘かつの三名が聖書婦人として活躍した。無知と迷信のため，婦人らの進歩は遅かった。彼女たちの活動の成果について，ボーカスは，キリスト教徒になってから，実にに多くの婦人が読めるようになったのは素晴らしい，最初，婦人たちは好んで歌う，というのは讃美歌の文字が覚え安いからで，すると聖書も難しくなりなり，勉強するようになる[注29]，と報告している。

不規則な出席と赤ん坊の鳴き声でどうにもならなかった学校は，一八九三年一月一日から改善され，ようやく小さな学校らしくなったという。教師は以前函館遺愛学校の生徒で，彼女は聾唖のため学校をされねばならなかった。しかし，聾唖であることは，子守娘学校では長所となり，彼女の愛情と忍耐とで子供たちは進歩したという。

女学校は九月に学則改正を願いで，十一月に認可された。その結果，予科課程（四カ年）と本科二カ年の私立弘前女学校となった[注30]。予科課程では週一時間単音唱歌が，本科では週一時間複音唱歌が教えられた[注31]。以上二課程の他に，女工科が設けられ，「唱歌及女礼式ヲ併セ教授」した[注32]。この科の設置によって，子守娘学校の生徒が進学する道が開かれた。

一八九四年の夏までに子守娘学校では三十名以上の子供たちが学んだ。教師が一人しかおらす，効果的に授業が出来るように，実際の出席者を二十人に制限する必要があった。全員唱歌の時間が大好きで，赤ん坊も静かになったという。両親の許可を得て，弘前女学校へ進学したのは六名であった[注33]。

ボーカスが米沢に出かけて留守の間，ミセス・ワドマン（Mrs. Wadman）が唱歌授業を受け持った[注34]。

一八九五年になると，五月一日までに学校は幸運にも優秀な日本人教師を数人採用できた。師範学校を卒業した二人のうち，一人は裁縫を四年間学び，もう一人は遺愛女学校で二年間トニック・ソルファを学んだよい声の持ち主であった[注35]。これは，函館の遺愛女学校が，この頃より，音楽教師を養成し，東北地方のミッションスクールへ優秀な音楽教師を派遣するセンターの機能を担っていったことの現れであった。

唱歌と発音矯正の問題

唱歌を歌うことに対する女生徒の受けとめ方について興味深い事例として，歌うことと発音矯正との関係を書いた弘前女学校生の卒業論文を紹介する。

弘前女学校の明治三十二年から明治三十五年にかけての卒業生は，卒業時に論文集を残している[注36]。これらは，各年度ごとに共通のテーマが示され，それに関して各女生徒が小項目をあげてそれぞれ論じる形をとっている。例えば，明治三十二年は，これから社会に出るに当たって自分を戒めるための「自警十二則」という共通テーマに基づき，各女生徒が各々「朝は四時に起きること」「事に当たりて熱心に勉強すべし」「欲を慎め」など十二の小項目を掲げて自らの所信を論じている。明治三十三年は，「女子の本文」，明治三十四年は「女子矯風会標榜五条」明治三十五年は「弘前女学校生徒進歩改善についての意見」などが共通テーマとなっている。これらは，それぞれの女生徒が自らの問題意識に沿って独自に小項目を掲げていることから，明治三十年代前半の女生徒の考え方を知るうえで，極めて貴重な史料となっている[注37]。その中

には，学力の問題や生活上の事柄など，多様な内容が見受けられるが，なかでも興味を引くのは，「言語の改良」について論じる学生が多いことである。

この「言語の改良」とは，言語の発音や方言のことであり，明治期の東北各地では，発音矯正や言語は大きな問題であった。これについて，例えば明治三十五年度卒業生である大橋千代は次のように述べている。

> 衣服改良と共に多いに言語を改良せざるべからず，一体我が青森県は同じ日本国にありながら一種特別の発音と野鄙なるの言を有せり，そもそも言語は口より出でて心の意を表し，筆を取りては文章となり，人世の用を達するものなり，されども日用取引交際の間一寸言語をあやまるときは，ために一場のはじとなり，人に笑われるのみならず，取り返しのならぬ損失をまねくことあり[注38]。

弘前女学校では，こうした「言語の改良」のため，毎週土曜日に小規模の練習会を開いて訓練していたことが，同年の卒業論文よりわかる[注39]。こうした学生たちの意識について，音楽の面で興味深いのは，歌を歌うことと言語の改良とを結び付ける記述が見受けられることである。例えばやはり明治三十五年の卒業論文であるが，阿保としは言語について，「毎朝歌うたう故，覚えずかなりあやまりは正されて比較的正し，又言語練習時間の設けありて熱心に言語の正実，明晰，優美，ならんことをつとめつつ」[注40]あることを書いている。ここから弘前女学校では毎朝歌を歌っていたこと，また，それが歌唱自体もさることながら，女生徒たちにとっては，発音や言語の問題解決との目的も含んでいたことを窺うことができる。

唱歌と発音矯正ー中川視学官の報告にみる秋田の例（唱歌の実態）

ここまで述べた弘前女学校生の唱歌と発音矯正についての認識に関連して，ここで当時の青森県公立小学校の唱歌教育の実態や，発音の問題について簡単に述べておきたい。周知の通り，明治五年の学制発布以来，カリキュラムに導入はされたものの，「当分之を欠く」との但し書きが付けられた唱歌は，当初なかなか普及しなかった。教材や楽器などの問題よりも，問題の本質は，日本人が，本来持っていた音感覚と異なる音組織になじめなかったからというところにあると思われる。早くから日本人に讃美歌教育を行った宣教師たちも，讃美歌の指導には苦労し，幕末期の宣教師たちは日本人に西洋音楽の歌唱指導を行うのは不可能との認識を持つものもあった。明治十六年になっても多くの宣教師はこうした見解を持っていたという[注41]。明治十年代以降，伊沢修二らにより音楽取調掛設置など制度整備は進み始めたが，地方に普及し始めたのはさらにおそく，青森県の場合は明治二十年代を過ぎてからであった[注42]。青森県に限らず東北地方の場合，風琴（オルガン）が高額で，各学校単位ではなかなか購入できなかったことや，指導する教員の問題などもあり，全般的に公立学校の唱歌教育が軌道に乗るまでには，かなりの時間がかかったようである。

明治二十年代半ば頃の東北地方での唱歌教育の実態を示す資料の例として，当時文部省から各地に派遣された視学官の報告書などがある。たとえば明治二十四年に秋田県の土崎高等尋常小学校を視察した中川視学官の『巡視日記』によると，同校尋常四年の女子の歌は，「長くして叫ぶの弊」があり，かなり低い水準であった様子が伝わる[注43]。おそらく青森の場合も大同小異であったことと推察される。この時の中川視学官の巡視日記を研究した弘前学院大学の麻生教

授は，東北地方の唱歌の場合，楽器の不足や教師の指導力という基本的問題とともに，生徒の訛音の問題も大きく，地方における言語の改良が唱歌に託された意図となっていたことを指摘している[注44]。

ところで日本で唱歌教育を推進した伊沢修二自身は，発音矯正についても熱心であった。伊沢は，アメリカ留学中に知己を得たグラハム・ベルの父であるメルヴィル・ベルが考案した視話法（Visible Speech）の，日本での熱心な紹介者であり，自身の英語習得時の経験をも加味して発音矯正の研究に取り組んだ。伊沢は人間が語学学習をする際，十五歳前後を過ぎると本来の音を聴いていないという認識を持ち，耳に頼るより目で見て「その通りの発音機関を作ってやる」方が効果的であると説いた[注45]。発音矯正についての講習会も開き，東北地方にも自身で赴いて指導し，特に秋田，山形には何度も足を運んだ。『東北発音矯正法』という本も著し，彼の視話法が，「青森，秋田辺では余程能く行われて，実際効力があるという報告も聞いて」いたという[注46]。青森県側も非常に積極的で，明治三十二年夏の講習会は，開会地で赤痢が流行し，危険であったために開会が断念されたにもかかわらず，青森県師範学校は「何分の危険を犯しても是非とも斯法の伝習を乞わん」との希望で二名を伊沢の所に派遣したことから，伊沢もその希望を入れて2週間の伝習を行った[注47]。

このように，伊沢は発音矯正の指導にも力を入れた。しかし，音楽取調掛を設置し小学唱歌集を発行し，唱歌教育普及のために音楽の効用をも様々に説いた伊沢自身が，発音矯正と唱歌との関連に言及したものはほとんどなく，この両者を結びつける発想は，希薄であったと見受けられるのは興味深いことである。

いずれにしても，弘前女学校の場合，開校当初から女性宣教師たちや，長嶺サダ，成田らくなど，程度の差は多少あるにしても音楽に造詣の深い教師たちが指導にあたったことから，専門教育をうけた教師がいなかった多くの公立学校よりは，唱歌の水準は高かったのではないかと思われる。既に述べたように，発音矯正に関心が深かった青森県において，歌で言語改良するという認識をもった人々が，弘前女学校卒業後に公立の小学校に着任し，自らがそうだったように毎朝歌うことで，発音矯正にも役立てようとする教育を行ったことは十分に考えられることであろう。そしてそれは，冒頭で述べたように，明治十八年の県立女子師範学校廃止から明治三十二年に県立師範学校講習科に女生徒を受け入れるまでの間，弘前女学校が県内でも極めて少ない女性教師養成機関となっていた事情を鑑みたとき，ミッションによる音楽教育の影響が公立学校にも広がっていった可能性が浮かび上がってくるのである。

注

注１　明治初期の女子就学状況に関しては，青森県教育史を研究されている千葉寿夫氏や，弘前大学の野口伐名教授，弘前学院大学の麻生千明教授らの研究がある。千葉寿夫『明治の小学校』（津軽書房，昭和四十四年），野口伐名「青森県における近代小学校成立の条件」（荒井武編『近代脱稿の成立過程の研究－明治前期東北地方に関する実証的研究』お茶の水書房，1986年），麻生千明「明治前期東北地方における女子の修学場今日と女子教育観に関する一考察」（『地域総合研究所紀要』第九号，弘前学院大学・短期大学地域総合研究所，1997年.）尚，北原かな子「文明開化と女性の変革」青森県女性史編纂委員会編『青森県女性史』（青森県発行，1999年）pp. 23-26.参照のこと。

注２　弘前女學校編『弘前女學校歴史』（弘前女學校，1927年）p. 73。

注３　弘前女學校編，前掲書，p. 23.ここに「ロスコー氏化学初歩」，「英スウィントン氏万国史」などが書かれている。

注４　カリキュラムに載っている中で洋書と考えられる９冊中，６冊と同様のタイトルの本が現在も

東奥義塾高校に保管されている。なお，東奥義塾の所蔵洋書については，北原かな子「東奥義塾所蔵洋書調査報告」『国際文化研究』第3号，東北大学国際文化学会，平成8（1996）年，pp. 101-118 参照のこと。

注5　安田寛，北原かな子「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第八十号，1998年10月，pp. 37-47.

注6　"I cannot close without speaking of the earnestness and zeal of my teacher who is such a help to me in all I understand that I hardly know what I could do without her. She has a nice way with children, and never looks happier than when she has a number of them gathered about her telling them about the Bible or teaching them to sing a hymn. She seems equally at home in woman's work. This summer the people in Morioka asked her to spend her vacation there in work among the women, they paying her expenses. She went and we hear good reports of her work." "Miss Hewett's Report." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1887):19-20.

注7　"Mrs. Wright, whose benevolence is so widely known, has not forgotten Hirosaki, and I had no sooner reached Hakodate last winter than she wrote that she and sent a large lot of dolls for next Christmas, and also an organ and a sewing machine." "Hirosaki." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1889): 30.

注8　弘前学院百年史編集委員会編『弘前学院百年史』（弘前学院，1990年），pp. 45-44.

注9　弘前女學校編，前掲書，p. 8.

注10　成田らくの経歴については，ご子孫の田中淑子氏のご教示による。

注11　旧弘前藩士族であった成田らくの父，茂が，明治初期に弘前から山田村に移住した際に塾を開設し，これが明治五年の学制発布により山田小学校となったことが，成田らくのご遺族がまとめた「母の面影」に記載されている。なお，文部省第二年報によると山田小学校設立は明治7年になっている。

注12　明治十五年九月から十八年三月までの足跡は不明である。

注13　「母の面影」非売品。この資料はご子孫の田中淑子氏の提供による。

注14　珍田捨己：弘前市の東奥義塾開学当初から同校で学び，明治十年に同校外国人教師であったジョン・イングの尽力により，他の四人とともにアメリカ，インディアナ州の，インディアナ・アズベリー大学で学んだ。帰国後，四年ほど東奥義塾で教鞭をとった後に上京して外務省に入り，卓抜な英語力を生かして，国際会議で活躍すると共に駐米大使，駐英大使などを歴任した。外務省を退いた後は宮内省に入り，侍従長として昭和天皇に仕えた。大正九年に伯爵となっている。

注15　成田正雄：旧姓珍田，珍田捨己の弟である。東奥義塾から旧制第一中学校に進み，東京帝国大学哲学科で学んだ。英語力に優れ，翻訳などにも力を発揮した。

注16　成田らく三男，辻元徳三氏の記述による（「母の面影」pp. 12-13.）。

注17　珍田捨己は明治十年七月二日にアメリカに向けて弘前を出発し，ジョン・イング夫妻は翌年三月に弘前を発った。珍田が帰国したのは明治十四年のことなので，珍田捨己，イング夫妻が共に弘前にいたのは明治十年七月までである。また，東奥義塾では財政難のため，明治十三年にロバート・F.カールを解約した後は，明治十九年まで外国人教師不在の時期が続いた。（笹森順造編『東奥義塾再興十年史』東奥義塾学友会，1931年）

注18　本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』（明治プロテスタンティズム研究所，1994年）pp. 82-85. "Eight weeks of teaching in the Fall is all we have been able to here." Miss Dickerson, Mrs. J. Wier. "Reports. Hakodate and Hirosaki." Minutes of the Sevenht Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1890): 23.

注19　弘前女學校編，前掲書，p. 24.

注20　本多繁，同上，p. 88.

注21　Hampton, Miss M. S. "Hirosaki. girl's School." Minutes of the Sixht Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1889): 29.

注22　"Mrs. Takami has taught regularly a class of women in the sunday School of our church,

and in addition to this she organized a street school in February last, this school making one of the four in active operation in the town. It has an average attendance of fifty, and three teachers. From this school some fifteen childre have been let do attend rerularly the school in the church. They are taught the Commandments, bible tests and singing of hymns, closing with a short Gospel address." Miss Dickerson, Miss Hampton, Mrs. Wier. "Reports. Hakodate and Hirosaki" Minutes of the Eighth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1891): 33.

注23 "I cannot express how much I appreciate having her in Hirosaki. When she left the Hakodate school we were greatly given distressed at our loss, but it has been gain for Hirosaki. The other teachers give a few hour's instruction and receive only a small salary." Hampton, Miss M. S., "HIROSAKI, GIRL'S SCHOOL" Minutes of the Sixth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal church in Japan, (1889): 29.

注24 Miss Dickerson, Mrs. J. Wier, ibid. 23.

注25 本多繁，前掲書，p. 89. Baucus, Miss. "Hirosaki Day School for Girls." Minutes of the Ninth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1892): 31-32.

注26 弘前学院百年史編集委員会編，前掲書，p. 45.

注27 "My most valuable and indispensable helper, however, in school work as in all other work, has been Otake O Sei San, my companion, my interpreter, my teacher, my assistant in every way. She taught all the translation and singing in the school, gave me two hours a day in Japanese, and has done almost a Bible woman's work besides. Until now she has had no vacation." ibid., 36.

注28 本多繁，前掲書，p. 91. Baucus, Miss. "Aomori District." Minutes of the Tenth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1893): 41-42.

注29 "The work among the women, on account of their ignorance and superstition, is very slow. One woman, lately baptized, wants to learn the Lord's prayer. She cannot read and no one in her house can read to her, so she learns a little at a time, whenever the bible woman or the pastor calls upon her. It is wonderful how many women learn to read after becoming christians. Forst they want to sing, and the characters in the Hymnal are so easy, that they master them. then the Bible does not seem much more difficult, and they study that. This is as far as their ambition usually carries them, the bible and Hymnal remaining their sole literature." ibid., 43-44.

注30 本多繁。前掲書，p. 93, 弘前女學校編，前掲書，p. 32.

注31 同上，p. 95, 弘前女學校編，前掲書，pp. 37-39.

注32 弘前学院百年史編集委員会編，前掲書，p. 79.

注33 本多繁，前掲書，p. 96. Baucus, Miss. "Aomori District." Minutes of the Eleventh Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1894): 43.

注34 "I am happy also to report to you Mrs. Wadman's kind and efficient help in giving instruction in singing, visiting the school, and filling various important offices during my abbsence in Yonezawa." ibid., 42.

注35 Baucus, Miss. "Aomori District." Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1895): 39.

注36 弘前市にある聖愛女子高等学校図書館所蔵。なお，この史料の入手に関しては，同校教諭の笹森正子先生，及び同校図書館の安部つね先生のご協力を得た。

注37 たとえば明治三十四年度卒業生の山形サイは「女子矯風会標榜五条」の一つに，「児童教育についての注意」をあげ，児童を教育するときの教育者の心がけについて述べている。卒業生が近隣小学校の教師になることが多かった同校の雰囲気を伝えるものであろう。

注38 明治三十五年度卒業論文「玉璞」所収の大橋千代の論文中，「五，言語改良」の部分より。

注39　明治三十五年度卒業論文「玉璞」所収の神みえの論文中，「五，言語」の部分より。

注40　明治三十五年度卒業論文「玉璞」所収の阿保としの論文中，「九，言語について」の部分より。

注41　安田寛『唱歌と十字架―明治音楽事始め―』（音楽之友社，平成三年）九十頁。手代木俊一「ジョージ・オルチン師の『日本における讃美歌』（全訳）」『フェリス論叢』（フェリス女学院短期大学，昭和六十一年）三頁。

注42　明治十七年に音楽取調掛で全国から募集した伝習生に，弘前から傍島万年（マネ）が選ばれて学んだ。帰京後，マネは青森県師範学校初の女子教員となるとともに，講習会などを開いた。県師範学校でまねから教えを受けた山中嵯峨之助らが，明治二十年代以降に公立小学校で唱歌普及につとめている。（笹森建英，今井民子「明治期の和徳小学校の唱歌教育」『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』 第一八号，1993年）。また，青森県師範学校生徒が明治十三年に東京に修学旅行に行った際に，伊沢修二が東京女子師範学校で拍子木をつかって音楽を教えている様子を参観している。（千葉寿夫『明治の小学校』増補改訂版，津軽書房，1984年，p. 150.）

注43　麻生千明「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究－その5・秋田県の学校視察と演説－」『地域総合文化研究所紀要』第六号，弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所，1994 年，pp. 1-17.

注44　麻生教授は，例えば田村虎蔵が，明治三十三年に発表した唱歌に関する意見の中で，奥羽，北陸のある地方で「数十名の児童が額に青筋を立てて，さも苦しげなる声して一時に怒鳴りだ」していたと述べていたことを紹介し，当時の唱歌教育の実態を明らかにしている。麻生千明「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究－その５・秋田県の学校視察と演説－」『地域総合文化研究所紀要』第六号，弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所，1994年，p. 5.

注45　伊沢は次のように述べている「全体人が正直に本当に他の発音を聴くと云うは先ず十歳前ぐらいのもので，最早十五六さいになって自分の量見が出来ると，自分の量見の通りに物を聴く，そう言う場合はいくら耳で聴いて習おうと思っても聴えない。しからばそれをどうして学習したならば宜しいかというに，目で視るより外仕方がない」（伊沢修二「視話法について」『伊沢修二撰集』信濃教育会，昭和三十三年，pp. 769-770.）

注46　伊沢修二「視話法について」『伊沢修二撰集』信濃教育会，昭和三十三年，p. 772.

注47　伊沢修二「東北地方発音矯正法に就ての弁」『伊沢修二撰集』信濃教育会，昭和三十三年，p. 760.

（1999．７．30受理）